

遠距離介護から目元へてくる「娘」の悲劇

パオッコ活動現場より①

NPO法人パオッコ ～離れて暮らす親のケアを考える会～ 太田差恵子

震災に便乗して、よからぬことを企む卑劣なヤカラがいるようです。こんなときにまで詐欺？ こんなときだからこそ平常心ではないので騙しやすく、騙されやすいのでしょうか。全国に広がっているようです。「義援金を振り込んでほしい」「リフォーム代金を振り込んでほしい」といった内容。あるいは震災による電気・ガス・水道の点検を口実に、各社職員を名乗り料金を請求したり、義援金として被災地に贈ることを口実に、貴金属の寄付や買取りを執拗に依頼するような事案もあるそうです。

料金が安くなる機器がある」といった不審な勧誘もあるそうです。警視庁のホームページには都内で実際に起きた事例が報告されています。「高齢者宅に仙台にいる親族をかたり、『震災で壊れた建物を直すのに150万円くらい足りない。直ぐに返すので貸してほしい。東京にいる友達が行くので渡して』と電話があり、その後、自宅に現れた男に100万円を手渡した。翌日、甥に確認の電話を入れたまされたことが判明」。なんと腹立たしい話です。

そういう時間帯にチャイムが鳴ることはこれまでありませんでした。不審に思いちようど居た長男に応答させたところ、相手は無言でその場を立ち去りました。ひとり暮らしなどでは、さぞ不安だろうと思いました。

国民生活センターでは注意を呼び掛けています。「震災に便乗して高価格で契約させたり、皆さんの工事をする可能性のある業者についての相談も寄せられている。消費者は、あわてて契約せず、できるだけ複数の業者から見積もりをとって価格を比較し、作業内容を事前に確認してから契約してほしい。また、見積もりのために現地調査に来てもらうための費用の要否につ

いても、事前の確認が望ましい」。この手の話は平常時からよく聞きます。遠距離介護での悩みのひとつともいえます。

「父が戦争のビデオを6万円も出して購入したんですよ」

「うちの父親は通信販売で60万円もする勳章を買いました」

「たまたま実家に電話したら、カーテンの業者が来ていて、親が家中のカーテンを注文している最中でした」。

お年寄り側に「なぜ騙されそうに？」と問うたこともあります。ある70代の男性は、相手の「名刺は立派だった」と言いました。その言葉に「えっ、立派な名刺なんてすぐにつくれる」と驚きました。「怪しいと思ったけれど、孫に似ていたから」と話す老女もいました。また、「いくら『要らない』と言っても帰ってくれないからお金を払った」という女性もいました。

先方が悪徳かどうかは分かりませんが、どれもが、 unnecessary 買い物、あるいは標準からはかけ離れた高すぎる価格がついて

いるものでした。

こういう商品を注文してしまつた場合、「クーリングオフ制度」を利用して解約する方法があります。消費者がいったん申し込みや契約をした場合でも、一定期間は消費者からの一方的な申し込みの撤回や契約解除を認める制度で、一般的には書面交付の当日から計算して8日目までだと撤回できます。分からないことがあれば地元の消費生活センターで教えてくれます。

もちろん、購入／契約した当事者がクーリングオフを行う

ことに気づけばいいのですが、「クーリングオフ」の存在や相談機関があることを知らないケースもあります。

ここで出番となるのが家族や地域の人々、自宅に出入りしている福祉関係者などです。実際、お隣さんが遠方に住む息子に「お宅に工事業者が出入りしているよ」と連絡してくれて息子がクーリングオフしたというケースもありました。また親の地元の親戚からの連絡で娘が業者に交渉して「不要モノ」を返却できた事例もありました。

悪徳商法の撃退ひとつとっても、連携や連帯がとても重要なのだということでしょう。撃退するためには、早期にその当事者が「何かを購入した／契約した」という事実を知らなければなりません。

難しいのは、当事者に騙された意識がないケースです。「騙し」ではない場合もあります。故郷の親が外資の金融商品にまで手を出していたと驚く「娘」の立場の人がいました。恐らく「悪

徳」ではなく、通常の営業だったというのです。営業の人はやさしくていねいに親の話を聞いてくれる。親に認知症があるわけではなく正常な判断力があれば、親が親本人のお金をどのように使おうと本人の自由です。実際その「娘」は見守るしかなかつたといえます。

こんな話もありました。これも離れて暮らす「娘」です。地元業者が、バスツアーのような雰囲気作りで遠方の呉服店まで母親を送迎。母親は「その度に着物を購入している」というのです。女性は言います。「お金があるうちはいい。でも、そのうち底をついたら」と。将来必要になるであろう介護資金まで呉服に代わってしまうことを恐れているのです。もし底をつけば、負担は自分たちにまわってくる可能性があるからです。

成年後見制度の利用も考えたそうですが、親本人が「必要ない」と言うためそれ以上の進展もありません。

「震災」や「高齢化社会」のス

キをつき、気持ちに不安定な人やお年寄りを食い物にするヤカラ。一方で、残念ながら「家族」や「地域」についても、必ずしも「善意」とは限らないのが現実です。「家族」のなかにも親の財産を食いつぶす者もいます。虐待しているようなケースさえあります。先に述べたように呉服店にお年寄りを送迎するような地元民もいます。

こう考えると、被害にあわないために「あのひとは信頼できる」と思える人の確保が大切なのでしょうか。親の地元にも、自身の周囲にも。家族や知人、専門家というくくりを超えて「信頼できる人」がいることは、金銭以上の財産といえるのかもしれない。

離れて暮らす子は「何か大きな買い物するときや、困ったことがおきたらいつでも連絡してね」と親に言うておくことが必要でしょう。「相談しようかと迷ったが、息子にいうと叱られると思うて…」言わなかった、というお年寄りもいました。

NPO法人パオッコ

～離れて暮らす親のケアを考える会～

親世代はできることなら生涯、住み慣れた家で住まい続けたいと望み、子世代も仕事や子どもの教育などを考えると、故郷に戻ることは容易ではありません。そんな状況のなか、親の心身に衰えが生じると子世代はどうしたものかと悩みます。

パオッコは「ひとりの経験はきつとみんなの役に立つ」という理念のもと、情報や体験を共有。ぜひ、ホームページに遊びにきてください！

〒113-0033 東京都文京区本郷3-37-8
本郷春木町ビル9F インキュベーションハウス内
ホームページ <http://paokko.org>